
The world which is in a state of flux(仮題)

樋口

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

The world which is in a state
of flux (仮題)

【Zコード】

N5513Z

【作者名】

樋口

【あらすじ】

人のように考え、人のように動き、自律成長プロトコル アルゴリズムによる精神の成長を可能とする人工知能の実現すら叶う時代。
二十一歳という若さで名だたる著名画家の仲間入りを果たした詩歌の元に、ある日身に覚えのない荷物が届く。

送り主の分からぬ怪しげな荷物を訝りつつも、閉塞した気分が紛れるならと一時の酔狂に身を委ね、開封して調べてみることに決め代。

る。

果たして、中に入っていたのは用途の不明な機器と、一枚の紙片だった。

これだけでは掴めない。

詩歌は機器の特徴ある形状と紙片に書かれた文字を頼りに、次世代のマルチメディアプレイヤーとして普及している『』で検索を試みる。

若干長めの接続時間のあと、表示されたのは膨大な数の検索結果。

その中で一際目を引く“『』公式情報サービス”といつページを覗き、概要説明文にあつた『新しい世界』というフレーズに惹かれた詩歌は、数多ある他のホームページに目を通してから規定の手順に従い、電子世界と呼ばれる未知の領域へ飛び込む。

ただひとつ、自身の性別を男性と偽つて。

第一章 “幸せの絵画” 一話（前書き）

はじめまして、作者の樋口と申します。この作品は一見SF風味のようですが、出来ればファンタジーとして読んでいただけたらと思っています。

さて、プロットや構想、詳細な設定を書き留めるために、こここの作品機能を使っているのですが、編集に不慣れで構想の一部が公開設定になってしまっています。

検索にはかからない設定にしていますが、度々こんなことが起こるかもしれませんので、出来るだけ「」見にならないように留意ください。

第一章 “幸せの絵画” 一話

「ねえ、いるんでしょう？」

玄関の向こうから聞き慣れた声が届く。
その声を努めて聞き流しながら、詩歌はすぐ傍にある居間の床
で毛布にぐるまり、胎児のように丸くなっていた。

「ちょっとーー！」開けなさいよーー！」

やけに通る怒声と共に扉を叩く音が何度も続き、室外の喧騒に
詩歌は思わず「うるさい」「こごめん」と口にしてしまう。

少し前は会うものの生返事しかせず、最近になつて会おうとする
らしなくなつたからか、彼女の反応は顕著だつた。

一際大きく詩歌の名を呼ぶと、太鼓を思わせる速さでひつきり
なしに戸を叩き始める。

しかし、それも長くは続かなかつた。

詩歌の貫徹した無視に、もう反応を返すつもりがないと悟つた
のか、やがて場は静まり返る。

怖いくらいの静寂が満ちる中で、詩歌は後ろめたい思いで嵐が
過ぎ去るの待つていた。

怖かつた。

彼女が善意から来てくれていると知つても、気心の知れた
友人である彼女が相手だとしても、詩歌は誰かと向き合つのを恐れ
ていた。

「なんで出てこひよつとしなこのよ……」

嘆くような、悲しむような咳きを聞いた時、玄関の向こうで苦虫を噛み潰したようにして、彼女が目に浮かぶようだった。

そんな言葉だけを残して、彼女は去っていく。石畳に立つ硬質な足音が早く遠ざかるように祈りながら、詩歌は消え入るようの一言、「じめんね……」と漏らした。

足音が聞こえなくなり、くるまっていた毛布から這い出すと、詩歌は玄関扉に付いた郵便受けから外の様子を窺う。

本当に誰もいなくなつたか念を入れるためだ。

自分でも笑えるくらい神経質な行動に、嘲笑いが零れる。

いなくなつたと思わせて油断を誘う。

彼女がそんな真似をするはずがないのに。

本当に自分一人であると確信を得た詩歌は、自らが住むマンションの一室を見渡す。

殺風景な部屋だ。

高層建築の粋を凝らして建てられたこのマンションは広く、十人でも易々と暮らしていくのに家具が必要最低限あるだけ。

古臭いブラウン管のテレビに、寝具とクローゼット、申し訳程度にソファーがあるくらい。

詩歌はこのマンションが好きではなかった。

生きていくのに不必要なくらい広い部屋も、庶人を寄せつけない格調高い外観も、息が詰まってしまいそうになることはあれど、喜んだことはない。

玄関の隅で蹲つていれば彼女に騒がしくされる。

そう分かつていても狭い玄関から動かないのは、広い部屋でひとりいる時間がどうしようもなく嫌いだからだ。

倦怠感を打ち払うように頭を左右に振り、リビングに向かって重い足取りで歩いていく。

このマンションは、著名な画家として恥ずかしくない家に住むべきだと、父親に厳しく言いつけられ、母親にやんわりと強制された結果だった。

インテリアに口出しされないのは誰かを招く必要なんてなく、このマンションに住んでいるという体裁さえ保てれば十分だと判断されたからだらう。

益体もないことを考えているうちに、リビングに辿り着いた。これまで高級そうなドアを開けて入り、部屋の隅に置かれた画布を手指し歩いていく。

脚立てられた油絵用の画布には、布が被せてあつた。
乱暴に布を取り払う。

投げ捨てられた布が床に落ちる音を聞きながら、詩歌は晒されたキャンバスを眺める。

そこには、完成した『作品』が描かれていた。

小さな頃から、絵を描くのが好きだった。

自分の思い描くものを目に見える形で現実のものにできる絵の世界に没頭した。

家族が笑い合つ光景も、怯えるように自分から距離を置く妹と仲睦まじく遊ぶ場面も、切望し手に入れられなかつ幸せを、平面上になら幾らでも生み出せる。

それは仮初めと呼ぶのも鳥游がましい虚構の幸せだつたけれど、

当時、孤独に潰されそうだった自分を絶望の淵から救ってくれたのも確かだつた。

だけど、今は……。 詩歌は田の前にある『作品』を感情のない、淀んだ瞳で見つめた。

テーマは『悲劇』。

長い時間をかけて二人の間に横たわるしがらみを乗り越え、分かり合えた兄弟に襲いかかる不幸。

兄は迫り来る異国の大軍の前に立ちはだかり、軍人として、兄として、また一人の人間として、愛する祖国と弟、そして幼い頃のように純粋な気持ちで笑い合える未来を守ろうとする。

死地に次ぐ死地を潜り抜け、遂には祖国を勝利に導き凱旋する兄であつたが、兄の心変わりを知つた王は自身の後ろ暗い所業が白日の下に晒されるのを恐れ、忠誠を誓い墓まで秘密を持っていくと心に決めていた兄を弓矢で射抜く。

凱旋中に矢を胸に受け、慌てて駆け寄つてくる弟とざわめく民衆の前で悲哀に叫び、睫毛を濡らす兄の姿を写実的に描いたのがこの絵だ。

そう、悲劇だつた。

詩歌は複雑な思いでその絵を眺め続ける。

自分に『悲劇』や『惨劇』を描き出す才があると知つたのは、いつの頃だつたろう。

作られた『幸福』を一枚、また一枚と描き、大きくなるにつれて、絵が嫌いになつていった。

幾ら『幸福』を描き出しても現実には何ら影響を与えず、素つ氣なくあしらわれ、優しいようで空っぽの言葉をかけられ、ぐぐもつた悲鳴を上げて後ずさられる。

虚実に過ぎないのだと想い知らされる。

今では絵を好きなのと同じくらい、絵が嫌いだった。

「わたしは何をしてるんだ？」……

シミ一つない真っ白な天井を見上げ独白して、しかしすぐに仕事だと気づく。

明田には、次に描かなければならぬ『悲劇』を描くための画材が届くはずだ。

益のない感傷に浸っている暇はない。

そう自分に言い聞かせて、詩歌は明日に備えて準備を進めていく。

作業中、先程口にした独り言が頭から離れることはなかつた。

第一章 “幸せの絵画” 一話

【画材が到着する日、詩歌は朝から憂鬱な気分でリビングに寝そべっていた。

ガラス張りの窓からどんどんよりと曇っている空が見えて、気持ちの沈みに拍車をかける。

今ばかりは嫌いなリビングも気にならない。

原因は一本の電話だった。

『近々、お前の伴侶となるに相応しい男を紹介する』

父からの電話だ。

やたらと話が長かつたけれど、簡潔にまとめるところの一点に凝縮されるのだろう。

後は振る舞いについての叱咤と、言葉面をなぞる程度の激励。この二つのやり取りは毎回と言つていいほどあり、半ばルーティン化されているので然程重要ではない。

てっきり、今回も決まり切った話をするものばかり思つていた。

……あと、いつもと違つ言葉が交わされる」とほんの少しの期待も。

電話が終わつた今、気分はどん底だつた。

悪い意味で裏切られた期待。

紹介するだけ、とは言つても、父の中で婚約は既に決定事項なのだろ。づ。

式の日取りも式場も、果てはウェディングドレスや参列者の選

定すら始まっているのだと確信できた。

違うとすれば神前式かもしれないといひへりい。

昔からそうだった。

父は恐ろしいまでに玄人主義を信奉する人で、選良という枠から外れることを酷く嫌う。

娘である自分をよかれと思う方へ牽引し、同時に父の社会的立場を揺らがせない保険ともする、徹底した合理精神の持ち主でもある。

進路に關することは父が取り決め、自分はそれに唯々諾々と従うだけでいい。

父は心の底からそう考へてゐるのだ。

まだ小さかつた頃から、父は必要以上の関心を自分に持たなかつた。

いつも念頭にあるのは、如何に下手な振る舞いをさせないかであつて、意思は一の次だつた。

医者や弁護士、学者に議員、実業家など、辣腕の人間ばかりを生み出す織倉の血筋。

そこについて、自分は一人前と認められていないのだと、かつての詩歌は考えた。

絵の世界でなければ、商社の役員にでもなつていただろう。

しかし描画の才があると知り、中でも『悲劇』や『惨劇』を表現する適性は類い稀だと気づいた時、詩歌は『幸福』を描くことをやめた。

ひたすらに『悲劇』や『惨劇』の絵を描き、才に磨きをかけ、

その末に描いた絵で名誉ある賞を受賞した日、父から本邸に来るよう言われた。

狂喜した。

いつもなら電話の口頭で済ませるのに、今日は直接会つと言つのだ。

今にも踊り出しそうな心を必死で抑え、自然と弾む声で了承する。

これで父に認めてもらえる。

いつもは威圧的に映る本邸が、その日は快く迎えてくれているように見えた。そして、急ぎ本邸に向かつた先で言い渡されたのは、転居を促す提案と、立ち居振舞いに一層気を配るよう念を押す言葉　それだけだった。

肩を落として消沈する帰り道、考えたのは、もつとたくさんの結果を示さなければいけない。

そうすれば、いつかきっと認めてもらえる。

そう、自分に言い聞かせた。

それから今に至るまで精進を心がけ、幾つもの栄えある賞を獲つて。

経歷にそれらが積み重なるのと同じ数だけ落胆した。

今や、国内外にその名を轟かせていると自負してもいいほどになつた。

なつて、しまつた。

床に華奢な身体を投げ出したまま、詩歌は自分の肩を抱く。
結局、自分はどこまでいっても、都合の良い人形でしかないの
だろうか。

視界に入つてゐるフローリングの若木色が滲む。泣いてゐるのだと気づいた。

一度でもいい。

父に、母と妹に、自分を見て欲しかつた。

絵に描いたものじゃない、本当の笑顔で笑いかけて欲しかつた。

そう思うのは、間違つていたのだろうか。自分には過ぎた願いだつたのだろうか。

……分からぬ。

詩歌は抱いている肩を更に抱き締めた。強く、強く、肌に爪が食い込むまで。

このまま、好きでもない人と結婚して生きていく。あるかどうかも分からぬ希望にすがつて、『悲劇』や『惨劇』を描き続けて。

限界だつた。

度重なる落胆に疲弊して傷だらけの心が、精一杯氣丈に振る舞つていた心が、砂の城を蹴飛ばしたように崩れていく。

痩せ我慢で塗り固めた心は、砂上の楼閣でしかなかつた。

不意に、来客を知らせる甲高い電子音が鳴り響く。

失意に暮れていた詩歌は最初のうち、気づきもしなかつた。しかし繰り返し鳴らされると漸く氣づく。

緩慢な動きで立ち上がり、よたよたと玄関に向かう。

一体何の悪戯だ、と思つた。

予定していた画材の配達は恙無く行われた。やたらと嵩張る不審物も込みで。

ただし、

「……何、これ」

画材の荷をほどくのも忘れ、不審物に貼られた配達明細を記載しているラベルへ飛びついた。

宛名、おつりくら 織倉詩歌。

住所、二二〇。

宛名は間違っていない。

差出人、内容物、不明。 警告、天地無用。

これで明細とは片腹痛い。

詩歌は至極真っ当な感想を抱いた。

「……とりあえずどうしよう」

字面にすると狼狽えているようだいて、実際、あまり動じていなかつた。

開けずに警察へ届け出るのが賢明だと分かっているからだ。

何事かで恨みを買つて危険物が送られたのかもしれないし、こんな愉快な悪戯で楽しませてくれる知人は残念ながら思い当たらない。

とは言え、今すぐにどうこうしないといけないものではない、と詩歌は判断した。

今の時代、宅配物について宅配業者の監査はとんでもなく厳しい。

そのため、爆発物だろうが何だろうが中を開けずとも見抜いてしまうのだ。

加えて立場上、専属の警備業者とも契約を交わし、配達されるものに異状がないか一重の監査が入ったのち、警備員によって届けられるのでまず危険を回避できる。

理想としては、不審物を自分の手元まで届かせないで欲しい。が、詩歌には、差出人不明の荷物を定期的に受け取らなくてはならない事情があった。

単身、実家から離れたところで暮らしている、妹の身の回りを調査した書類だ。

この荷物を受け取った時　いや、今もずっと、誰かと話すのが億劫だったので、ろくに確認もせず、予期しない差出人不明の荷物を受け取ってしまった。

……まあいい。

詩歌は不審物を放置し、丁重に包装された画材の箱を

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5513z/>

The world which is in a state of flux(仮題)

2011年12月19日19時00分発行